



杉岡仁教授近影

杉岡仁教授定年退職記念号に寄せて

経営学部長／経済・経営学会長 岸 川 典 昭

杉岡仁教授は、2006年3月末日をもって38年間勤められた経営学部（旧商学部）経営学科を定年退職されることになりました。ここに長年にわたる名城大学および経営学部（旧商学部）に対する先生の御貢献に感謝の意を表する次第です。

先生は1956年3月に名古屋大学経済学部経済学科を卒業された後、同年4月の名古屋市立名古屋商業高等学校教諭を経て、1968年4月に名城大学商学部及び短期大学部講師（簿記論担当）として着任されました。その後、1970年4月に同助教授、1977年4月に教授に昇任され、1980年4月大学院商学研究科修士課程で財務会計論演習を、1994年8月同研究科博士後期課程新設と同時に同課程で会計学原理特殊研究を担当されました。なお、2000年4月の改組に伴い経営学部にも所属し、2001年の大学院の改組に伴い経営学研究科にも所属し、2003年4月の経営学研究科博士後期課程設立に伴って、会計学原理特殊研究を担当されています。2003年3月には名古屋大学より博士（経済学）の学位を授与されました。このように長年に渡り教育と研究に情熱を注がれ大学ならびに学部の発展に大きく寄与されてきました。

研究面では、会計と監査、および両者の関係に注目し多角的な議論を展開されてきました。1970年代から1980年代前半にかけては制度会計領域を中心に、財務諸表及びその他の財務報告による企業内容の開示について研究されています。この間、それらの諸問題に関連するいくつかの論文、並びに『企業簿記概論』『財務会計の理論と実務』等を発表、出版されています。そして、これを踏まえて1980年代後半からは会計の新動向としての連結会計、キャッシュフロー会計、時価会計、会計基準の国際化等のビックバンの展開を考慮して、会計と監査の観点からそれら諸課題を理論的に解明し、現代経済社会の中での会計と監査の役割及び期待ギャップとその解消のあり方、会計と監査に対する不信の払拭の方向性などを考察し、会計と監査の相互関連性の理論的精緻化を行ってきました。その成果が1992年に出版された『外部報告会計と監査（第2版）』並びに、2002年の『会計ディスクロージャーと監査——再生と更なる発展』であるといえます。なお、1989年には公認会計士制度40周年記念論文優秀賞を受賞し、1998年には公認会計士制度50周年記念論文最優秀賞を受賞するなど、その業績は高く評価されています。近年における会計分野の変動は大きく、また多岐にわたっておりますが、先生は歴史的動向やその方向性をしっかりと見据えて研究をすすめられており、その研究態度および研究内容は価値あるものであり、高く評価されるものです。

教育面では、簿記会計の研究を希望する学生に正規授業時間帯以外でも自主講座を実施するなど、学生の教育に細心の注意を払いながら、彼らの人間形成と知的素

養の育成のために全力で取り組み、多くの優秀な人材を育ててこられました。また、公認会計士、税理士の育成にも情熱を注がれ、熱心な指導の下で多数の合格者を輩出し、さらに、卒業生の会計専門職業人で構成される名城大学会計人会を組織され、顧問として組織の充実を図っておられます。

行政面では、1981年6月からの2年間および1995年6月から2年間の大学協議員、1983年6月から2年間の商学部長及び大学院商学研究科長、1983年6月から2年間の大学評議員、1985年6月から1989年5月まで4年間の就職部長などを歴任され、その間名城大学および経営学部（旧商学部）のために多大なる貢献をなされてきました。

ここに杉岡先生の長期にわたる名城大学での研究、教育、行政に対するご苦勞とご功績に心から感謝し、定年退職記念号を刊行し、先生に捧げたいと思います。先生は謙虚な方であると同時に非常に責任感が強い方であり、教育でも、行政でも常に適切なアイデアや指示を出してくださるとともに、自らも几帳面に実行される方です。学部では、常に後輩教員に対して暖かく接しておられ、教育、研究の面においても有意義なアドバイスや適切な意見を与えてくださるなど、先生のご恩を受けた教員・職員は私を含めて数多くに上っているといえます。今後はなにとぞ健康に十分留意されて、これまで以上にご活躍されることを祈念いたしまして、定年退職記念号によせる言葉とさせていただきます。